

気の音楽療法 — 『莊子』から読み解く一人称の実践—

荒川有加

おとだまのつかい

I はじめに

音楽を文字や数値で表現したとしても、それはその音楽そのものではない。音楽は音楽によってしか再現できない。私について、私をよく知る人が詳細に語り、私の写真を見せたとしても、それによって生きた私の存在そのものを伝え切ることにはできない。会話も同様に、文字で内容を詳細に記し様子を書き加えたところで、それはその時の会話そのものではない。録音や録画でさえも、その時のそのものではない。なぜこれらは再現できないのか。それは、これらでは「気」をうまく表すことができないからではないだろうか。

これら「気」は私ができるように感じるのか、私は確かに経験した、という類のものである。それゆえに「気」は個人的であり主観的であり、他者に同様の体験を厳密に再現させることはできない。現代では一般に、客観性・再現性のないものを科学と呼ばない。しかし「気」のように今日科学的と言われていないものでも、確かに存在していると多くの人が体験的に分かっていることが、世の中には沢山ある。科学によってもたらされた多くの恩恵を受けて生活しているこの現実を、否定することは難しいが、それでも科学が解明し語るができることは、「物事の全て」ではなく、「有

用な一側面」というのが、妥当な考え方ではないだろうか。河合隼雄や山中康裕が説くように、一般にいう客観科学だけではない、もっと、全体性を射程に置いた、いわゆる「心の科学」というような新しいジャンルを追及せねばならないと思う（『宗教と科学の接点』『老いのソウロロジー（魂学）』）。

日本の音楽療法は、数量的、実証主義的な研究傾向が称揚される傾向、欧米に比べ本質主義的な研究や理論的研究・学際的研究（とくに人文科学との議論）が極端に少ない傾向があると指摘されている（阪上，2008）。私は音楽療法歴13年のセラピストだが、音楽療法の記述記録や事例発表原稿を書く時に、いかに工夫しても実際のセッションを文字でうまく表現できないことに疑問を持っていた。また演奏者として長年音楽にたずさわる中でも、その経験や感覚をうまく説明できないでいた。やがて私は「何か伝え切れないもの」が、自分の行っている本当のこと・本質的なことなのではないかと考えるようになった。

この論文において筆者は自分のことを「私」と記す。学術的ではない日常の言葉も用いる。なぜなら、文字で再現できないもの・伝え切れないものを扱うには、自分の経験つまり「私」の主観を書き尽くすし

か方法がないと考えたからである。そしてその「何か伝え切れないもの」を、「気」の視点、「気」の思想によって解釈していきたいと考えている。

II 「響き」という名の「気」

1 レイキとの出会い

レイキ（靈氣）は古くから行われてきた癒し（ヒーリング）の技で、百年余り前、白井養男（うすいみかお）氏が創始した手当て療法である。土居（1998）は次のように説明している。「白井先生は『宇宙に存在するものは、ことごとく靈気を保有している』といわれ、『すべての存在の根源である宇宙エネルギー』を『靈氣』と名づけられました。それは『高次元の存在』から発せられる『愛の波動』であり、かつ純粋な『光』のことであります。（中略）

『宇宙エネルギー』は、すべてのものの中に存在していますが、人間の体内にあるときは『生命エネルギー』となり、自然治癒力や人生を力強く生き抜くための活力を与えてくれます。『生命エネルギー』はオーラ、気、生氣、靈氣、靈子、生命磁気、プラーナ、人体放射能、その他さまざまな名称で呼ばれています」。また白井氏が、大正11年3月に鞍馬山で「『宇宙即我』『我即宇宙』の一体感を達成され、求めていた悟りの境地を完成」したと述べている。しかし日本では精神性を重視していたためか広くは伝わらず、その方法を伝授された人が海外に渡って、それがニューエイジ運動と共に欧米で大きく発展していった。近年その西洋式レイキが、欧米の医療従事者も行う。ヒーリングの技として逆輸入されたが、日本の伝統靈気も連綿と続いている。

ある日レイキに興味を持ち始めた私は、当時教育分析を受けていた臨床心理士の先生に相談した。すると先生は、「私が教える」と言い、レイキを伝授してくださった。先生ご自身もレイキに行き着いたのだと話し、レイキは目や口からも伝えることができる、あなたは音楽をするので、きっと声でレイキをすることができるはずだと言った。私は日々あらゆるものにレイキを実践し始めた。自分の身体、動物、植物、友人の腰痛、コップの水には声でレイキをした。すると実際に不思議な変化が見られたが、とりわけ水（飲み物）に声でレイキした時が顕著であった。いったいどのように作用しているのかわからないが、実際に味（口当たり）が変わることは、紛れもない事実であった。私の感じでは、水に声をかけることで、水がほんの少しだけ揺れるように思われた。そしてその微細な揺れ（響き）によって、表面近くの水が反応し、その反応は次々とコップの中の水に伝わっていく感じがした。レイキのシンボルやマントラの種類（響き）によって、水の変化の仕方も変わった。水はちゃんと「響き」を聞き分けているとしか思えなかった。手のひらからレイキを伝えても、水は同様に反応した。水は手のひらから出る「響き」も聞き分けているということになる。レイキは私にとって、「響き」という名の「気」になっていった。

2 レイキと音楽療法

レイキを伝授されてからは、音楽療法を行う部屋に毎朝レイキをした。クライアントに目でレイキをすることもあった。レイキは基本的に相手に了解を得ずに行うこと

をよしとしていない。しかし私とクライアントの関係は、セラピーを行うという前提で関係が成り立っているので、レイキを音楽療法に用いることは可能だと考えた。

しかし前節で述べたように、レイキによってあれほど様々な変化が見られたにもかかわらず、私の行っていた音楽療法においては、クライアントが変化していく様子やクライアントと私が相互作用的に変化していく様子は、レイキを用いていなかった頃と比べてほとんど変化が見られなかった。この結果は、私が行っていた音楽療法がもともと、レイキと同様の性質やはたらしきを持っていたのではないかということを示していた。音楽療法の様子は変わらなかったが、私自身の理解度や意識は変わった。音楽療法の場において起こる様々な変化について、「なぜ変わるのかわかる気がする」と思うようになった。以前から私は、歌声を使ってクライアントにかかわった時に、よりはっきりとしたクライアントの変化を実感していた（荒川，2007）。特にこの「歌声」がレイキと関係を持つように思えてならなかった。また、レイキという言葉こそ用いていないが、山中康裕が行っている高齢者への歌唱療法において起こっていることと明らかにオーヴァーラップしていると思われた（『老いのソウロロジー（魂学）』）。コップの水に声でレイキを行った時に、味の変化が見られた。人間もほとんどが水でできている。人間の中の水も変わるのではないか。そもそもなぜ私はレイキを「響き」として感じるのだろうか。それは私が音楽療法士である前に、ひとりの音楽人としての経験が大きく関係しているように思われた。

3 失われた響き

私はトランペット奏者でもある。現代の鍵盤楽器（ピアノなど）や電子楽器は十二平均律を使っているが、器楽の魅力は何と言っても、要所で純正律の音楽ができることだ。バイオリンなどの弦楽器、管楽器、そして人の声は、音程を微調整できるので、純正律を作り出すことができる。十二平均律は均質な響きが得られるが、完全に協和した純正な響きは得られない。しかし十二平均律は利点の方が圧倒的に多く、時代が進むにつれて世界に普及した（石桁他，1965）。個人的な経験では、純正な響きには、真に人を癒す力、気づきを与え悟りに導く力があるように思われる。そのように思う理由は、自分の身体が心地良い、気持ちがいいと感じるからにほかならない。また現代の楽器はほとんどがA=440ヘルツ、オーケストラでは442ヘルツなどでチューニングされているが、古い西洋音楽では、地域によって、現代より半音くらい低い（あるいは高い）ヘルツでチューニングされていたと言われている。またシュタイナー教育で用いるライアー（豎琴）は、432ヘルツにチューニングして以来、癒しの力を持つようになったと言われている。私の経験でも、440ヘルツよりも432ヘルツ位の方が、ホッとして心地よい。

私は西洋の古楽器も演奏する。リコーダーのように音孔を持つその楽器は、Cornett（コルネット）、ドイツ語でZink（ツィンク）と呼ばれる木製のリップリード楽器だ。17世紀まではバイオリンに並んで賞賛されていたが、18世紀になると急激に廃れてしまった。ツィンクは演奏が難しいと言われる。私は演奏が困難なこの

楽器を吹いていると、当時の人々があらゆるものに祈りを持っていたこと、夜空の星と対話していたことを感じる。合理的で機能的なもの引き換えに失ってしまった、大切な「何か」、精神性、たましいのようなものを感じるのだ。古楽では、楽譜は比較的簡素であった。それゆえに、奏者が即興でメロディを変奏することができる「あそび」（創造性）を有していた。現代では、一部のジャンルを除いてほとんどの音楽が楽譜の通り演奏される。

純正律、チューニングの多様化、廃れた楽器、即興…。そこには根源的なものを実感させる「響き」があるように感じられる。

4 演奏の中から現れるもの

私がオーケストラでトランペットを演奏していると、作曲者がその曲を作った時の思いや、その時代特有の喜びや苦悩が、渾然一体になって感じられることがある。私たちの演奏をパイプにして、当時と今がつながってしまうような、過去と現在が今ここに同時に現れたような、時間を超越してしまう感じがする。この瞬間しか味わえない再現不可能な「何か」（音楽）として顕現する。これはすでに個人的なレベルを超え、人類全体の思い、地球に存在する生物や鉱物の思い、さらに無限の宇宙までどんどんつながっていく気がする。また、オーケストラ全体が休符を取っている時、残響が去った後の静寂に、今まで聞いたこともない「何か」（音楽のようなもの）が聞こえることがある。それはとても微細なもので、混沌としていて、それでいてきれいな光のようなもので、見守る大きな目のよう

で、言葉で説明できない感覚・感情のように感じられる。この性質は、山中康裕によれば、安永浩の言う「中心気質」という気質の人に顕著にみられるようだ（「心理臨床の広場」2012（谷川俊太郎との対談）参照）。

また、上手く演奏しようと思っただけでなかなかうまくいかない。作為がない時には、自分で予想もできないような力が発揮できることがある。私の知人に書道家がいるのだが、その人は書のことを「凍れる音楽」と呼び、上手く書こう、こうやって書こう、などと考えているうちは、決して満足のいく作品が書けない、無心になることができれば、あとは自由に書いただけと話していた。楽器演奏でも書でも、その域に至るまでの修練が必要なことは、言うまでもない。

同じ楽器であっても、演奏する人が変わると全く違うものが伝わってくる。同じ人が演奏していても、その日その時によって異なるものが伝わってくる。これは演奏の出来、不出来の話ではない。演奏には、どうやってもごまかせないその人自身、存在そのものが映し出されるということだ。プロの演奏もアマチュアの演奏も、聞いている人は、上手下手を超えた「何か」を聞き、感じとっていると思われてならない。

次章では、このような私が、音楽療法という場で出会ったAさんの事例を取り上げる。

Ⅲ 大いなる導き - Aさんの事例 -

1 認知症のAさんで行った音楽療法

アルツハイマー型認知症を患ったAさんと私は、月3回、各1時間の音楽療法の時

間を共有していた。様々な流行歌を歌い、私のキーボード演奏に合わせてAさんがドラムスティックで多彩なリズムを演奏し、テナーサクスを吹くAさんとトランペットを吹く私が、互いにメロディを紡いでいき、私のキーボード伴奏に合わせてAさんがテナーサク스로即興演奏をした。音楽性豊かなAさんと、非常にクリエイティブな時間を過ごしていた。Aさんは家族が目を見ることができない状態だった。しかし音楽療法の時間だけは、Aさんは「一人の音楽人」であった。家族もAさんのその生き生きとした様子に驚いていた。

ある日、Aさんが大動脈瘤乖離で救急搬送され、危篤宣告の後、昏睡状態（植物状態）になったという知らせを聞いた。家族に了解をもらい、見舞いに行った私は、沢山の管に繋がれ人工呼吸器をつけているAさんのそばに駆け寄り、話しかけ、手を取った。Aさんとの音楽療法はこれで終わりになると思っていたのに、なぜか「これが始まり」である気がした。そしてAさんは、このようなつらい状態に、わざわざなられたかのような気がした。きっと何か意味があるに違いないと思われた。Aさんが、「やってみなさい」と私の背中を押しているような気さえした。私は毎月通っている先生（臨床心理士・芸術療法士）に相談した上で、Aさんの家族に、病院で引き続き音楽療法をさせていただけないかと申し出た。昏睡状態になって音楽療法をやっても意味がないと言われたら、引き下がろうと思った。しかし家族は少し考えてから、「（父は）音楽が大好きだったので、喜ぶと思います」と、音楽療法の継続を許可してくださった。家族のどなたかが同席

すること、録画することも了解が得られ、月3回、各1時間の音楽療法が再び始まった。認知症のAさんとは、それまですでに4年半、106回の音楽療法を行っていた。昏睡状態になられてからは#107～#181まで、75回のセッションを行った。この75回の中から、特に印象的なものを選び、記録を元に再度記述していく。なお、#107以降、伴奏楽器は使用していない。

2 昏睡状態のAさんで行った音楽療法

#107 <B病院のベッドサイドにて>

Aさんの左手をとって話しかけると、閉じた目の中で眼球が動く。（元々動いていなかった、声に反応してくれたのかな）。手を取ったまま人工呼吸器のリズムに合わせて歌いかける。（こうすると一緒に歌っている気分になるかも）。「私の声が聞こえたら目を動かしてください」と伝えると、まるで返事のようにまた瞼の中で眼球を動かす。（ああ、やっぱり私の声はちゃんとわかっておられるんだ。Aさんなりに返事してくれているんだ）。次の曲について提案すると、口の左上が動く。（やっぱり返事かも。イエスカノーかわからないけど）。Aさんの大好きな『星の流れに』を歌いかけると、突然体全体がピクンピクンと2回動き、瞼の中で眼球もよく動く。「また来てもいいですか」と何うと、眼球がクルッと1回動く。（これはきっとイエスの意味なんだ!）。<セッションの記録について、小括弧内には私が思ったことを記している>。

私はこの1時間、できる限り自分の考えていること、伝えたいことを、喋ってAさんに伝えた。Aさんが何かを動かして反

応した時には、「今××が動いておられましたね！」など、フィードバックをして、「それはとても凄いことなので、もしできそうだったら、もっとやってみてください」と励まし、促す言葉かけをした。

＜振り返り＞ 私はAさんの「何」に向かおうとしていたのだろう。Aさんの身体だろうか。確かに私が目で見ることができるのは、Aさんの身体だった。Aさんもまた、私への返答を、私に見えるように伝えようと努力しておられたように思う。私もAさんの身体の動きに込められた思いを読み取るよう努めていた。そのうちに私は、ある奇妙なことを感じるようになった。それは、Aさんの身体そのものに、身体の細胞ひとつひとつに、Aさんの記憶のようなものが宿っている感じ、身体が語ってくる感じだった。まるで目に見えない「煙」のようなものか、「震え」のようなものが発散しているような、そういうものに思われた。山中康裕は、人間の全細胞が心であって、けっして脳だけではないとっている (personal communication)。

#138 <C病院のベッドサイドにて>

「突然倒れて一年が経ちましたね。人生色々とは言いますが、この一年どう…」と話しかけると、Aさんは大きく体全体を動かす。(話している隙から反応するなんて、よほど強い思いを伝えているんだ。やっぱりAさんにとってこの状態はとても辛いもの、何にもわからない状態なんかじゃ決してないんだ)。「この一年、少しでも良いことはありましたか」と尋ねてみるが、Aさんは全く反応しない。(もしかして私がこうして時々来ることを喜んでくれているかも知れないという私の甘い期待

は砕かれ、とても恥ずかしくなった)。同席しているお嫁さんと私が桜の話を始めると、Aさんの体が動く。直太郎桜やコブクロ桜の話になり、お嫁さんが「お父さんは夜桜お七やね」と言う。私が『夜桜お七』を少し口ずさんでいくと、Aさんの体が動く。サビの部分をお嫁さんと一緒に歌うと、Aさんは首を右や左に回す。(Aさんはちゃんと「夜桜お七」を覚えているし、一緒に歌を楽しんでくれている)。私が「次回『夜桜お七』を練習してきます」と言うと、Aさんは即、体を動かす。(あ、賛成してくれている)。お嫁さんが「お父さんは歌が好きだった」と話すと、Aさんは首を大きく左へ回す。(そうだよ！と大いに同意しているんだ)。お嫁さんが「デイでもよく『長崎物語』を歌ってた」と話すと、Aさんは目を開け、表情がガラリと変わって、初老の男性の、ダンディな顔つきになる。

＜振り返り＞ Aさんの反応は、目を開ける、眼球を動かす、体全体をピクンと動かす、足(膝)をピクンと動かす、足先(指)を動かす、首を(左右に)動かす、口を動かす、表情を変化させる、あくびをする、「ぶっ」などの音声を発する、人工呼吸器のパイプを「ゴッ」と鳴らすなどの、多彩な様子が見られるようになっていた。それらはすべて、私(私たち)の発した言葉や歌に呼応する形で現れた。首の動きは、左右で肯定否定を使い分けていると思う日もあれば、特に使い分けをしていないと思う日もあった。否定の場合は、何の反応もしないという方法を取ることも多かった。いずれにしても、Aさんが、Aさんのでき得る最大限の表現方法を用いて私

(私たち)と疎通を図ろうとしてくれていたことは間違いない。その際、健常人と同じ基準でその様子を判断することはできないと感じた。例えば、顔をしかめているような表情の変化でも、それはAさんの笑顔かもしれない。体や筋肉を自由に動かすことができないことを踏まえ、前後の文脈や、過去のやり取り(認知症の頃)、また私がそれを「どのように感じたか」で意味を判断した。また私は、口で話す方法と頭の中や心の中で話す方法を用いていたが、どちらの方法でも同様に疎通が取れている感じがあった。私が声に出さずに伝えたことについては、Aさんは身体で反応することもあったし、私の頭の中や心の中にふと言葉が浮かびあがってくるという形で返事が伝わってくるということもあった。はじめはこのような経験を、自分の思い込みだと思っていた。しかし、そのようにキャッチした情報を用いて、歌いかけ、話してみると、引き続きAさんの身体の反応が現れ、Aさんがその流れを納得している気配を感じたのだった。こういったことを繰り返していくうちに、私の頭にふと浮かぶものの、心に浮かぶものはAさんのメッセージであるかも知れない、そうである場合がありえる、と思うようになった。私を感じた応答は頻繁だった。1時間はあっという間に過ぎて行った。

この頃、私は不思議な場面に遭遇した。私が病室に到着してAさんに挨拶し、音楽療法を始める準備をしていた時だった。突然Aさんがそわそわと動き出した。「え、どうして」と思った瞬間、病室の扉が開いて、お嫁さんが駆け込んできたのだった。Aさんは大切な家族が自分のそばにやって

くる前に、予知・予感していたとしか思えなかった。Aさんは何もわからないどころか、私たちの常識を超えた力を持っていたのではないだろうか。

#140 <C病院のベッドサイドにて>
Aさんの好きな『長崎物語』、前奏のハミングから既にAさんは首や目、口を動かし、あくびをする。(この歌を楽しむ支度を始めたみたい、期待しているのも伝わってくる)。曲中の、音を長く伸ばすフェルマータの部分について、「どれくらい伸ばしたらいいか、教えてくれませんか」とお願いすると、Aさんは少し左へ首を動かす。「さあ、うまくいくでしょうか」という私の言葉にも、少し左へ首を動かす。

(さあ~どうかなあ、やってみようかなあ~という感じかな)。そうしてもう一度私とお嫁さんがこの歌をうたい出すと、Aさんはまるで準備運動のように少し首や足を動かし、(おっ、やる気になってる!)フェルマータの部分で、♪あ~~~と伸ばすと、3秒程して、Aさんがはっきりと首を左へ、ポトンと傾ける。それを合図にして、私はフェルマータを終わらせ、歌をうまい具合に続けることが出来た。(すごい!合図を出してくれた!)

<振り返り> 認知症の頃は、この曲のフェルマータの部分でどれくらい伸ばすとよいのか、Aさんが手の動きで長さやニュアンスを指揮していた。昏睡状態のAさんもそれを覚えていて、今できる方法で合図をしていたと思われた。その後も、何度か同じことを行ってみたが、7~8割の確率で何らかの表現が現れた。Aさんの身体状況も変化した。はじめの頃は痰が詰まり、たびたび吸引が必要だったが、次第に減少

し、一年が過ぎた頃には、私がいる時間に吸引することはなくなった。さらにこの頃、Aさんが咳のように息を強く吐いて痰を切る様子が、たびたび見られるようになった。Aさんは自ら歌うことはできなかったが、のどの働きが高まるというのは、まるで自分で歌うことで効果をあげたかのような身体の変化だと思った。Aさんの身体は私の歌声の「響き」に共鳴し、調和することで、歌うことと同じことが起こっていたのではないだろうか。

Aさんが昏睡状態になって大前提として考えたのは、倫理的な配慮だった。言葉で意志を伝えられないAさんが、私のすることを受け入れているか拒否したいと思っているか、どのように思っているか、いつも考えていた。反省的、批判的に自分の行いを見つめるよう心がけた。同席している家族の言動にも同様に気持ちを向けた。音楽療法という場において、「響き」で相手に何らかの影響や変化を与えることは、責任のあることである。

3 四十九日までの間にAさんと行った音楽療法

Aさんのお通夜と葬儀に参列させていただいた。遺影は、Aさんが音楽療法でサククスを演奏している時の顔写真だった。数日後ご家族は、四十九日まで仏前で引き続き音楽療法を続けて欲しいとおっしゃった。私は「ぜひお願いします」と即答した。それが果たして音楽療法と言えるのか、何が出来るのか、確実な答えはなかったが、今求められていることを精一杯するという思いだった。四十九日までの音楽療法は、#182から#186である。

#183 りんを鳴らして始める。家のあちこちから様々な生活音が聞こえる。私がそれに耳を傾けていると、Aさんが二年ぶりの我が家を楽しそうに見ているように感じられる。話しかけると返答が感じられ、家のことやあの世のこと、夫人とのなれそめなどを話す。『星の流れに』を、後方にいた家族も一緒に歌う。その時、幼少のお孫さん（男の子）に「もっと大きな声で歌わんか、ほら！」というAさんの声が聞こえたように感じる。それとほぼ同時に、同じ内容の言葉が、息子さんの口からお孫さんに向かって発せられる。

#186 旅立ちの支度が整い、家族のことももう何も心配することはないと、Aさんが穏やかに笑っているのが感じられる。『長崎物語』では、フェルマータの部分で光が弧を描いて動く感じが感じられたので、それに合わせて歌う。うたの本をパッとめくると、Aさんの好きな『湯島の白梅』が出てくる。最後に『星の流れに』を歌うと、Aさんもサククスを手に取り、演奏している感じが感じられる。長きにわたる感謝を述べて、仏前を失礼する。その後、息子さんとお孫さんの様子を見ると、Aさんの精神が受け継がれ、世代交代をした息吹を感じる。

<振り返り> 仏前での音楽療法の記録では、気配、空気、そんな気がする、そんな感じがする、という言葉ばかりが並んだ。目に見えないもの、耳に聞こえないものばかりだ。Aさんがこの世での身体を離れ、Aさん自身が目に見えないAさん、耳に聞こえないAさんになったのだから、当然なのかもしれない。私がレイキを伝授されたのは、#140を過ぎてから、つまりAさん

が亡くなる一年くらい前であった。前に述べたように、私がレイキを自分や音楽療法の場に用いるようになって、それまでの音楽療法の様子は特に変化がなかった。しかしレイキによって、目に見えないもの、耳に聞こえないものが、私にとって実体験を伴った確かなものになった。レイキは特別な能力ではない。もし私に何か要素があったとするならば、それは、自分が感じることに、より小さく微細なものがわかるように、感性の目盛りを細かくしようと心がけたことではないだろうか。そして、「響き」という「気」の視点を、自分の中に持つことができたからではないだろうか。

ここまで私の「実践」を記してきた。それはレイキの実践、演奏者としての経験、音楽療法の事例であるが、これらは決して別々のものではない。これらは私の中で有機的に密接につながり、融合し、「統合された体験」として顕現したのである。しかしこれだけではまるで、骨のない血肉の塊のようである。この私の実践を、研究として生きたものにするためには、バックボーンとなる考え方、思想、哲学が必要になる。ゆえに、次章では、思想・哲学との対話を通して私の実践を読み解き、意味付け、解釈をしていく。しかしAさんの事例は、科学的・客観的な視点では読み解くことができないのではないかと考えた。行動は観察できたが、通常の意味をそのまま用いることはできない。感覚（五感）の範囲を超えている。亡くなってからは、人間という有機体すら超えている。読み解くには、おそらく科学的視点・人間だけの世界観を超えたものが必要になるのではない

か。

IV 『莊子』との対話 —新しい視点を求めて—

1 『莊子』に会う

自分自身の実践を読み解くため、私は心理学をはじめ、様々な思想や哲学の本を手にとったが、なかなか納得できるものに出会えなかった。そんな時、ふと、以前部分的に読んだ『莊子』のことを思い出し、夢中になって全巻を読んだ。そしてそこに、私が実践してきたことの全てが書かれていると確信したのである。

『莊子』三十三篇は、中国古代の道家思想を伝える重要な古典である。孔子・孟子の儒家の教えは中国の正統思想として、老子・莊子の思想はその裏側でひそかに、しかし力強く、人生についての深い思索をいざなうものとして生きてきた。老子と莊子ではいくらかの違いがある。老子では現実世界での成功を目指す現実関心が強いのに、莊子はそれをまったく乗りこえている。『莊子』において目ざされたものは、人間社会の束縛から解放された絶対的な精神の自由であり、自然と冥合した魂の安らぎであった。（金谷，1971）。

私は『莊子』を読んで、日本との深いつながりを感じた。老莊思想は後に道教に大きな影響を与えたが、卑弥呼の鬼道と呼ばれたもの、シャーマニズム、古神道、修験道、陰陽道、仏教、密教、禪、武道や茶道など「道」のつくもの、能や文学・詩歌などの文芸、これらにはみな、『莊子』の思想が流れていることを感じ取った。また私の中に莊子と同様の「思い」、つまり現在主流派の考え方に対して、オルタナティ

ブな
り根
方を
もし
から
出
えて
道家
につ
子』
は「
と言
よっ
ナル
『莊
はト
ある

2
何か
な
たの
ちが
無数
親、
や野
の調
との
……
の疎
か。

ブな考え方の必要性を感じていたこと、より根本的で、たましいの安らぎとなる考え方を書き記したいという使命感があったかもしれない。「響き」という「気」の視点からも、『莊子』はそのものであった。坂出(1993)は「『気』を思想の中核にすえている思想家は、老子や莊子、すなわち道家である」と述べ、著書において「気」について語る際には『老子』ではなく『莊子』を多く引用している。つまり『莊子』は「気の哲学」「気の思想」の代表であると言える。また、東洋思想や禅の影響によって生まれた心理学に、トランスパーソナル心理学があるが、東洋思想も禅も元来『莊子』に関係している。よって『莊子』はトランスパーソナルな視点の思想哲学であるとも言えるであろう。

2 安知魚楽—相手の気持ちが変わるとは何か

なぜ私と昏睡状態のAさんは疎通がとれたのだろう。だが「何となく相手の気持ちが変わる」という経験は、日常において無数にある。赤ちゃんの気持ちを察する母親、ペットの気持ちを理解する飼い主、花や野菜の具合を感じとる農家の人々、機械の調子を勘で見抜くエンジニア、山川草木との対話から言葉を紡ぎ出す詩人・俳人……こういった人間の行いは、私とAさんの疎通と同様のことなのではないだろうか。

子曰女安知魚楽云者、既已知吾知之而問我、我知之濠上也、

君は「お前にどうして魚の楽しみがわかるのか」といったが、それはすでに、僕の知識のていどを知ったうえ

で、僕に問いかけたものだ。〔君は僕ではなくても、僕のことをわかっているじゃないか。〕僕は濠水のほとりで魚の楽しみがわかったのだ。〈外篇・秋水篇〉(金谷, 1975)

魚が自由に泳いでいるのを見て、魚が楽しそうだったと庄主に、友人恵子が、魚でない君にどうしてそれがわかるのかと問いかける寓話であるが、「魚の楽しさは、直接魚になってみなくても、濠水のほとりに立っておのずからわかる。万物のあいだには、ことばや形をこえた感通の理がある」(金谷, 1975)ことを示唆している。『莊子』は万物の間には言葉や形を超えたつながりがあるという、「万物斉同」の考えに基づいているのだ。

天地一指也、萬物一馬也

天地も一本の指である。万物も一頭の馬である。〈内篇・斉物論篇〉

(金谷, 1971)

「万物斉同」とは、万物はすべてひとしく一つである、ということである。一つであるということは、どこかでつながっていて、わかりあえるということ、言葉や行動、客観的な証拠に頼らなくても、わかりあえるということを目指するだろう。しかしそのためには、意識的あるいは無意識に「わかりあえる」と思っている(わかっている)ことが必要な条件になるのではないかとと思われる。

3 物化—気で交流するとは何か

死後に音楽療法を継続し、死後のAさんと交流を持ったことを当然だという人は、稀であると思われる。では私の行った、死後のAさんとの交流は、どのような考え方

によって読み解くことができるのであろうか。

不知、周之夢爲胡蝶與、胡蝶之夢爲周與、(中略)此之謂物化、

いったい莊周が蝶となった夢を見たのだろうか、それとも蝶が莊周になった夢を見ているのだろうか。(中略)こうした移行を物化(すなわち万物の変化)と名づけるのだ。〈内篇・齊物論篇〉(金谷, 1971)

世の人々の多くは、現実と夢は別のもの、人間と蝶々は別のものだと思っている。しかし、「その夢が現実でなく、その現実が夢でないと誰が保証し得るのか。一切存在が常識的な分別のしがらみを突きぬけて、自由自在に変化しあう世界、いわゆる物化の世界こそ実在の真相なのである。人間はただその『物化』—万物の極まりない流転—の中で、与えられた現在を与えられた現在として、楽しく逍遥すればよい」(福永, 2011)と云うのである。ならば、ものごとを区別し、固定させて見ることは、いかにも賢くものごとを明らかにしたつもりで、実は真実を取りこぼしているといった、皮肉な結果を導くことになりかねないのではないか。

人之生、氣之聚也、聚則爲生、散則爲死、(中略)故萬物一也、

人が生きているのは気が集まっているからで、気が集合すると生となり、分散すると死となるのだ。(中略)だから万物も[同じ一つの気の変化であってもともと]一つなのだ。〈外篇・知北遊篇〉(金谷, 1982)

万物の変化、人間の生死も気の変化であると言う。身体も気の凝集であるが、それ

は人間の目で見ることができるとは思えない。もし目に見えない気と疎通をはかろうと思ったならば、何かしらの方法で目に見えない気を感じなければならぬ。では、身体を持つ私が目には見えない気の次元になるとは、どういった方法でできるのだろうか。

无聽之以耳、而聽之以心、无聽之以心、而聽之以氣、(中略)氣也者虚而待物者也、唯道集虚、虚者心齋也、耳で聞かないで心によって聞くようにし、心で聞かないで気によって聞くようにせよ。(中略)気というものは空虚でいてどんなものでも受け入れるものだ。そして真実の道はただこの空虚の状態にだけ定着する。この空虚の状態になることこそ心齋なのだ。〈内篇・人間世篇〉(金谷, 1971)

気とは「宇宙的直観」であり、「宇宙に遍満し、一切万物を成り立たせる原質」であり、「宇宙そのものと一つになった純粹さを『虚』(心齋)という」(福永, 2011)。セラピーを行う際、クライアントを変えてやろうなどと思っていると、全くうまくいかない。これは音楽を演奏する時の、うまくやってやろうという思いとも通じているように思う。気で聞くと、気の状態になることも言えるが、知識や判断を離れて自分の感じることに委ねること、マインドを離れて万物斉同の境地になること、宇宙の一気とひとつになることではないだろうか。気の状態になると、感じるものが全てになり、判断や疑いは消え、意思は自由に飛び回るようになる。こうして気の状態でA氏と共鳴が始まり、自由な交流が可能となったのではないだろうか。

その交流はとても自由で楽しかった。

4 天籟—すべては響きである

汝聞人籟、而未聞地籟、汝聞地籟、而未聞天籟夫、

お前は人の吹く籟（ふえ）は聞いているとしても、まだ地の籟を聞いたことはなく、お前は地の籟を聞いたとしても、まだ天の籟を聞いたことはないであろう。〈内篇・斉物論篇〉

（金谷，1971）

「籟」は響きの意で、「天籟とは人籟・地籟のほかさらに天籟とよばれる別の響きがあるのではなくて、地籟を地籟として聞き、人籟を人籟として聞くことが、そのまま天籟だという」、また、人が人であり、地が地であること、換言すれば、天とは、あるがまま、自然ということであり、分別（因果的思惟）を超えているということなのである、と福永（2011）は述べている。あらゆるものが響いている、独自の響きを持っている。その響きは形こそ違っても同じ性質のものであるということである。人間が奏でる音楽も、風の音のような地球上の自然現象も響きであり、人間や動植物・物体なども各々独自に、自発的に鳴って（響いて）いるのであり、地球のみならず宇宙の星々や、宇宙そのものも鳴って（響いて）いるというのだ。

有成與虧、故昭氏之鼓琴也、無成與虧、故昭氏之不鼓琴也、

完成と破壊とがあるのは、昭氏が琴をひいた場合であるし、完成と破壊とのないのは、昭氏が琴をひかないばあいである。〔昭氏のような名手でも、琴をひくとそこに分別が生まれる〕〈内

篇・斉物論篇〉（金谷，1971）

昭文は琴の名手であるが、彼がいかに上手に琴を弾いたとしても、無限のメロディは奏でられない（成立しない）。無限のメロディを聴くには、方法はただ一つ、琴を弾かないということである、という寓話である。しかし「虧」は、欠（かく）という意味も持つ。私はこの部分を、欠、つまり不完全という意味で読んだ。琴を弾けば無限のメロディの一部が現れる。そして琴を弾くのを止めれば、無限のメロディが現れると。これは演奏会の最後の音が終わった後の余韻、演奏時の休符に現れる美しさ、音楽療法の場で私とクライアントと一緒に歌ったり曲を聴いたりした後の、何とも言えない静寂や余韻を表しているように思えてならない。私たち人間が奏でる音楽は美しい。しかし本当に美しいのは、その音楽が止んだ時であることも実感してきた。音が止んだ瞬間に開ける宇宙、音が天地に消えていった後に開く世界、と言った方がよいだろうか。音楽は、そういった普遍的なメッセージを、身体の細胞ひとつひとつに向かって、人間の心・精神・たましいに向かって、直接響きとして届けることができるのではないだろうか。響きが伝わると、自分が本来「響き」であったことを思い出して、共鳴が起こるのではないだろうか。そして共鳴によって調和が取り戻され、治癒や変容が起こるのではないだろうか。

5 神（しん）—テクニックを超えたもの
臣之所好者道也、進乎技矣、始臣之解牛之時、所見无非牛者、三年之後、未嘗見全牛也、方今之時、臣以神遇、而不以目視、官知止而神欲行、

私めの求めておりますものは道でございまして、手先きの技より以上のものでございます。私めがはじめて牛の料理を致しましたころは、目にうつるものはただもう牛ばかり〔手のつけどころも分かりません〕でしたが、三年たってからはもう牛の全体は目につかなくなりました。このごろでは、私めは精神で牛に対していて、目で見ているではありません。感覚器官にもとづく知覚は働きをやめて、精神の自然な活動だけが働いているのです。〈内篇・養生主篇〉（金谷, 1971）

『莊子』において「神」（しん）とは、「精神」といった意味合いのものである。世俗の生活を生きる中に真の超越がある、『莊子』は全篇を通してそのように訴えている。この寓話を読み、これはまさに私がトランペットを演奏してきた道のり、セラピストとして経験してきた道のりについて語っているかのように思われた。はじめの頃は、技ばかりに気を取られていた。技術さえ上達すれば、よい演奏よいセラピーができると思っていた。しかし上手になりたくて懸命に練習すればするほど、実際に相手に伝わっているのは、技ではないのだと感じるようになった。「精神の自然な活動を働かせて牛を見る」というのは、牛の「気の体」「気のはたらき」を、「気」で見ているということであり、「こうしてやろう」という作為ではなく、本来自然のものに従おうとする精神なのではないだろうか。

6 救—セラピーとは何か

夫道不欲雑、雑則多、多則擾、
擾則憂、憂而不救、

あの〔お前が守らねばならない〕道は〔純粋なものだから〕雑りけがあってはいけないもので、雑りけがあれば多様になり、多様であれば乱れ、乱れば心配ごとも多く、心配ごとがあるようでは他人を救うことはできない。

〈内篇・人間世篇〉（金谷, 1971）

福永（2011）は「他人にはたらきかけることを考える前に、もっと自己自身に徹底すべきだ。心が安定しているためには精神が統一されていなければならない。問題はまず自己が道と一体になることだ」と述べている。セラピーを行うには、自分が大いなるもの（道、自ずから然るもの、天、宇宙、神、など）とひとつになっていることが前提になる、ということもできる寓話である。では、自分が道と一体になっていればそれでよいのか。いや、そうではない。相手の気持ちを考えず自分の正しさを押しつけるということは、善意という刃物で相手を傷つけるようなものだ。人間の心は複雑かつ微妙であることを肝に銘じつつ、洞察することが不可欠であることは言うまでもない。

彼且爲无崖、亦與之爲无崖、

達之入於无疵、

あちらが気まま勝手であれば、こちら
もいっしょに気ままにふるまいなさい。
〔あいてのとおりに従いながら〕
あいてを導いて欠点のない境地へとひ
き入れることです。

〈内篇・人間世篇〉（金谷, 1971）

福永（2011）は「調子を合せても自己の主体性を失って相手にひきずられず、相手を感化しながら、そのはたらきが外に現れないようにすることが難しい」という。

他者に調子を合わせても、自分の主体性を保ち、感化されていることを相手が気づかないように行う、これは慎重さと細心の注意を要する仕事である。

7 無用の用—昏睡状態とは何か

私はこれまでの音楽療法における関わりの中で、認知症の人は神に近づいている人だと感じてきた。大井（2008）は終末期の痴呆老人について、「この世」と「あの世」が浸透しあった「あわい」の世界にいるという印象を受けると述べている。昏睡状態のAさんと関わるにつれて私は、Aさんは何もできない状態ではなく、特別な役目を持っている人、身をもって天寿を全うしている人に思っていた。

桂可食故伐之、漆可用故割之、人皆知有用之用、而莫知无用之用也、
肉桂は食べられるために伐りとられる。漆は役にたつために切りさかれる。人々はみな有用なものが役にたつことはわかっていても、無用なものが役にたつことを知らない。〈内篇・人間世篇〉（金谷、1971）

Aさんが昏睡状態だった3年間のご家族の様子を見ていて、Aさんは、家族の絆をしっかりと結びつけて、事業や財産を整理して再出発させる時間を息子さんに与えていたように思われた。そしてそれがAさんにとって、大切な家族を守る方法だったに違いないと。Aさんは私にこの論文を書かせてくれるほどの大きな体験を残してくれた。私を通してAさんが大切にしていたことが世の中に伝わっていく。これは真の意味での有用ではないか。Aさんは医療で延命されていた。それが手放して幸せだった

かはわからないが、与えられた状況の中で遅く「今この瞬間」を生きてみせてくれたAさんは、もはや人間ではなく神や仏の領域、自然や宇宙としての存在・役割を担っていたように思われた。

8 天使—天命とは何か

絶迹易、无行地難、爲人使易以僞、爲天使難以僞、

ある所へ行かないでいるというのはやさしいが、大地をふまないでいるというのはむづかしい。人の世の仕事ならそれをだましてずるけることもやさしいが、天の世界の仕事ではだましてそれに逆らうことはむづかしい。〈内篇・人間世篇〉（金谷、1971）

福永（2011）は「莊子は『人使と為ることなく天使と為れ』と教える。『人使』とは人間的な作為に身を委ねる者であり、『天使』とは天理の自然に身を委ねる者である」と解説している。『莊子』において「天使」とは、人間世界・世俗の世界で地に足をつけて生きながら、自ら然る大いなる営みに自分を委ねて生きる者という意味になる。では、大いなる営みに身を委ねるとは、どういうことなのか。

知其不可奈何、而安之若命、德之至也、

人の力ではどうしようもないことがらをよくわきまえて、その境涯に身を落ちつけ、運命のままに従っていくというのが、最高の徳です。〈内篇・人間世篇〉（金谷、1971）

それは、「あらゆる必然をただ自己の必然として素直に受け取ってゆく大いなる運命への愛と肯定」であり、「必然とは自己に与えられた偶然にほかならないのであ

る」(金谷, 2011)。

吾得斗升之水、然活耳、君之言此、曾不如早索我於枯魚之肆、
一斗か数升そこそこのわずかな水さえあればわたしは元気になれるというのに、あなたはそんなのきなことを言われる。それじゃ、早く乾物屋の店先きに行って、〔干乾になった〕このわたしをさがした方がましというもんだ
〈雑篇・外物篇〉(金谷, 1983)

道にできた轍にいた鮒に、水を持ってきてもらえないかと声を掛けられたところ、これから玉様に会うので、帰り道に長江の水をかきたてて迎えにくるよと答える。その言葉を聞いて鮒が上記のように言い放つ寓話である。私はこの話に得体の知れない深い力を感じた。日常に現れる「縁あって自分の目の前に現れた人や出来事」は、「偶然」である。その「偶然」に今の自分を尽くすこと、今の自分に求められたことをすること、それが「天使」(天の世界の仕事)に対するスタンスであり、大いなるもの(天命・運命)に身を委ねるといことなのではないだろうか。このような視点を以って振り返ると、私がAさんと音楽療法を行ったことも、Aさんが昏睡状態になって私と過ごしたことも、人間の世界における「天の世界の仕事」であったということになりはしないだろうか。

9 光一目に見えない真実

夫道有情有信、无爲无形、可受而不可傳、可得而不可見、
一体、道とは、実在性があり真実性がありながら、しわざもなければ形もないもので、身に受けおさめることはで

きても、それを人に伝えることはできず、身につけることはできても、その形をみることはできない。〈内篇・大宗師篇〉(金谷, 1971)

「道」、私はこれを「真に大切なもの」と考えている。私が実感してきた「響き」という名の「気」は、「真に大切なもの」にとっても近いものではないだろうか。同時にこれは、私がこれまで書き記してきた自分の実践経験、昏睡状態のAさんとの音楽療法、四十九日までの音楽療法、レイキの実践、楽器演奏において、確かに私の中で存在しているにもかかわらず言葉にすることができないもの、「そのもの」だったのではないか。

世之所貴道者書也、書不過語、語有貴也、語之所貴者意也、意有所隨、意之所隨者、不可以言傳也、

世間で、道を求めるために尊重するのは、書物である。しかし、書物はことばをつらねたものにすぎない。ことばには大切なところがあって、ことばの尊重すべきところはその意味内容である。意味内容にはそれがもついで生まれてきたところがあって、意味内容のもついたところは、ことばでは伝えられないものである。〈外篇・天道篇〉(金谷, 1975)

『莊子』が述べていることを当てはめると、体験を言葉にできたと思ったならば、もはやそれは真実ではない、道ではないということになる。しかし、言葉が大切なものであることも『莊子』は認めている。

故知止其所不知、至矣、(中略)而不知其所由來、此之謂葆光、
そこで、知識についてはわからないと

ころでそのまま止まっているのが、最高の知識である。(中略)しかもそれがどうしてそうなのか、その原因が分からない。こういう境地を葆光(内にこもった光)というのである。〈内篇・斉物論篇〉(金谷, 1971)

よくわからない、それは安らかな明らめである。そしてその境地は「光」である。わからないところでそのまま止まるのが、最高なのだ。ここで終わりにしよう。『荘子』の言うように、この境地を以って、人間世界に戻ろうではないか。

V 気の音楽療法

これまで音楽療法を行っていた時、クライアントと過ごしていると、突然インスピレーションのように曲がひらめいて、実際に歌ってみると多くの反応が得られ、実はそれがクライアント(認知症の人)にとって非常に思い出深い大切な曲だったことを、後で家族から聞かされて驚くといったことが度々あった。また今、目の前にいるクライアントに提供するのはいかなる曲がよいか、頭で考えてわからなくなった時、おもむろにうたの本に手をかけ、ページをめくって、ピンとくるものに決めたり、おもむろにCDを探して、手に取った印象で曲を決めたりして、そのような方法で提示したものが、結果的にセラピーの進展に大きな役割を果たしていくということが何度もあった。山中康裕によれば、彼がこの25年間行なっている高齢者への歌唱療法も全くこの通りだと語っている(personal communication)。

私は、人間が活動するエネルギーも、人間の意識の働きも無意識の働きも、感情も

意思もイメージも、人間の身体も、集合離散する物質の働きも、ものの最小単位も、宇宙や地球の源も、そして言葉も声も、匂いも光も、音も音楽も、すべて生き生きと流転する「気」の視点、「気」の思想で説明できると考えた。その中でも、特に「響き」は「気」そのものであると考えている。五感で感じるものも、五感以外で感じるものも、共に「気」であると思っているが、「気」は五感「だけ」では感じる事ができないのではないか。そして、「気」を感じるには、「気」の視点を持つことが必要であり、そのためには実践や体験を伴う必要があるのではないかと考えている。

音楽、音や声は、「響き」という名の「気」そのものである。セラピーにおいてそれを用いることは、言葉や運動を使った「気」に比べて、クライアントを、セラピーの場を、より直接的に揺さぶり、共鳴させる。またその揺さぶりは、滞っている「気」の流れを調和させ、本来の自分らしさを取り戻し、力を発揮させていく方向へ、自然に導く。これらは私が実感したことである。ハーン(1998)は「音楽の素晴らしさは、それが人を思考から離して、精神集中や瞑想を助けることです」と述べているが、これは音楽が、人知の次元から大いなる叡智の次元に導く働きを持つということを示しているのである。

黒木(2006)は、「セラピストがセッション中の何処に注目するかによって、その流れが変わってくる」と指摘しているが、私も、セラピストの視点がクライアントにかかわる際の対面姿勢を構築し、セラピーにおいてその視点の持つ要素を有効に活用させることにつながると考えている

(荒川, 2012)。また黒木 (2006) は、
 気の流れを促進させるセラピーで「重要な
 ことは、思考を先行させてはならないとい
 うことである」と述べている。これはまさ
 に私が実感していたことであり、「気」の
 セラピーを行う時に必要な考え方である。
 しかしこの文章を読んだとしても、読み手
 が真にわかるかどうかは、読み手の体験に
 かかっているのではないだろうか。ここで
 問題になるのは、体験は時間を要する場合、
 タイミングが関係する場合があるという
 ことである。例えば「気」を体験するに
 は、自分が自然に体験できるようになるの
 を待つことも必要であり、「気」を体験さ
 せてくれる師に出会うといった人生におけ
 る時期やめぐりあわせも必要である。視点
 と体験が自分の中に結晶化するということ
 は、因果ではなく、縁起なのではないか。
 山中康裕 (1990) は、このあたりを縁起
 律という、因果律とは全く異なった体系を
 主張している。

さて、私は、「統合された体験」のひと
 つの側面としての「私の行う音楽療法」
 を、「気の音楽療法」であると考えている。そ
 れは思想哲学に基づいた「気」の次元の行
 い、世俗的な時空間だけに縛られない、す
 べての次元を含んだという意味で超越的な
 宇宙的な行いである。しかしこれは、私だ
 けが特別だという意味ではない。誰もが、
 音楽療法でいえばクライアントの誰もが、
 元々こういった存在なのである。私たちは
 皆、『莊子』のいう「天使」なのである。
 ただ、そういった次元が姿を現すのは、セ
 ラピストとしての私がそのように存在する
 ことによって、そしてそれらを見つめよ
 う、感じようとすることによってなのであ

る。

この論文は、「私にとっての真実」を記
 したものである。しかし、このように自
 分の視点と体験を究めようとする姿勢が、
 そして「気」という、超越的な、トランス
 パーソナルな次元を価値あるものとして
 示すことが、新しい次元の価値観を開く
 「光」になると考えている。

<付記>本稿は、2011年度立命館大学大
 学院修士論文として提出したものを大幅に
 縮め、一部加筆修正した。

【文献】

- 荒川有加 (2007): 「歌いかけ」と「行動に
 よる表現」を振り返って. 音楽療法JMT.
 17. pp.41-46
- 荒川有加 (2012): 音楽療法におけるエロ
 スの重要性. 日本芸術療法学会誌41-2.
 pp.43-53
- ベーレント, J. E. (1986): 世界は音—
 ナーダ・ブラフマー. 大島かおり訳. 人文
 書院.
- 土居裕 (1998): 癒しの現代霊気法. 元就
 出版社.
- 福永光司 (2011): 莊子 内篇. 講談社.
- 石桁真礼生, 他 (1965): 楽典—理論と
 実習. 音楽之友社.
- 金谷治 (1971-1983): 莊子 第一冊~第四
 冊 (訳注). 岩波書店.
- 河合隼雄 (1986): 宗教と科学の接点. 岩
 波書店.
- 北本福美 (2002): 老いのころと向き合
 う音楽療法. 音楽之友社.
- 黒木賢一 (2006): <気>の心理療法入
 門. 星和書店.

ミンデル、アーノルド（2002）：昏睡状態の人と対話する。藤見幸雄・伊藤雄二郎訳。日本放送出版協会。

ハーン、ハズラト・イナーヤト（1998）：音の神秘。土取利行訳。平河出版社。

大井玄（2008）：「痴呆老人」は何を見ているか。新潮社。

坂出祥伸（1993）：「気」と養生—道教の養生術と呪術。人文書院。

阪上正巳（2008）：音楽療法の世界的展望とわが国の課題。日本芸術療法学会誌 37-1, 2. pp.7-29

山中康裕（1990）縁起律について。大東祥孝・松本雅彦・新宮一成・山中康裕編『青年期、美と苦悩』。金剛出版。

山中康裕（1991/1998）：老いの魂学(ソウロロジー)。有斐閣・ちくま学芸文庫。

山中康裕（2012）：「心理臨床の広場」谷川俊太郎との対談。日本心理臨床学会。創元社。

山中康裕(2012)：personal communication

これは立命館大学に提出された修士論文の抜粋である。私は、無論指導教官ではないが、著者の出てくれているヘルメス研究会で折りに触れて関与しているので要約をお願いしたものである。

（編集長 山中康裕、記）